

近世期の人麻呂・赤人の一面

―河野美術館蔵『柿本朝臣・山部宿禰歌集』について―

藤田 洋治

朝比奈 英夫

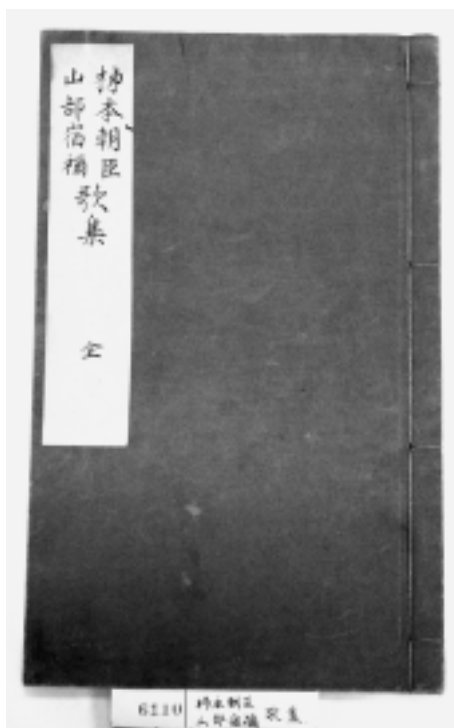
(京都光華女子大学)

解題

一

柿本人麻呂、山部赤人は、『古今和歌集』序にその名を紹介され、『前十五番歌合』、三十六歌仙にも選ばれることとなる。人麿は、とりわけ歌仙、歌神として信仰され続けることになる。そのような中で、『人麿集』や『赤人集』は、平安期に既に成立し、名称も内容も種々のものが伝存することとなる。冷泉家時雨亭文庫の資料をも踏まえて、竹下豊氏は、『人麿集』は四類七系統、『赤人集』は三類に分類しておられる^①。幾つかの本文が存在し、またその本文に増補したり、改訂した伝本も存在することになる。

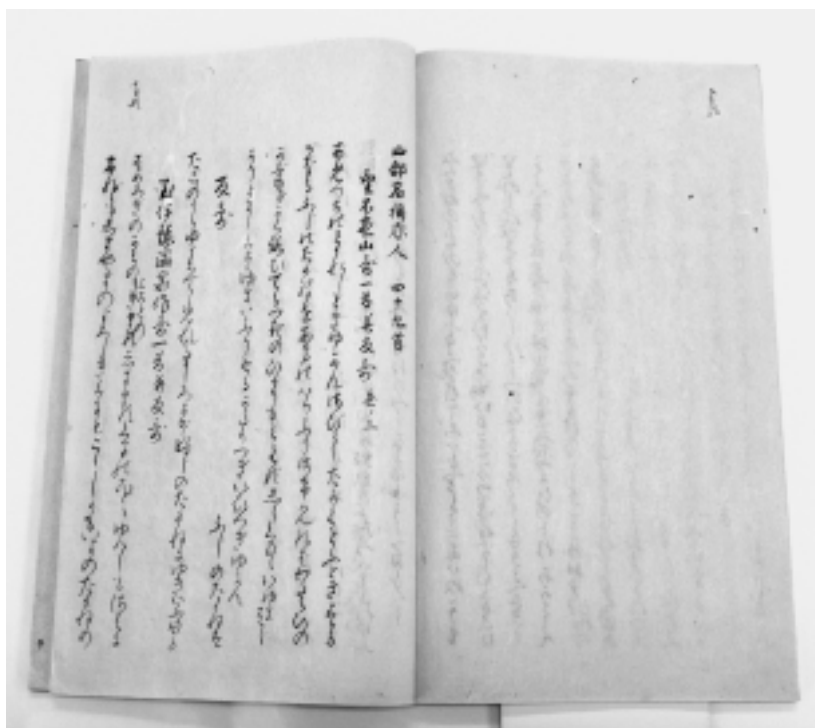
一方、『万葉集』は近世期に実証的な研究が進み、柿本人麻呂や山部赤人も、神格化された伝説に基づくものではなく、『万葉集』の内部徴証から把握しようとする動きが現れてくる。江戸期における人麿の新たな家集については、藤田洋治「近世期『人丸集』の変容(上)―付、翻刻『人麻呂百首』―」^②が佐佐木信綱^③の驥尾に付して論じてはいるものの、言及されることは稀である。



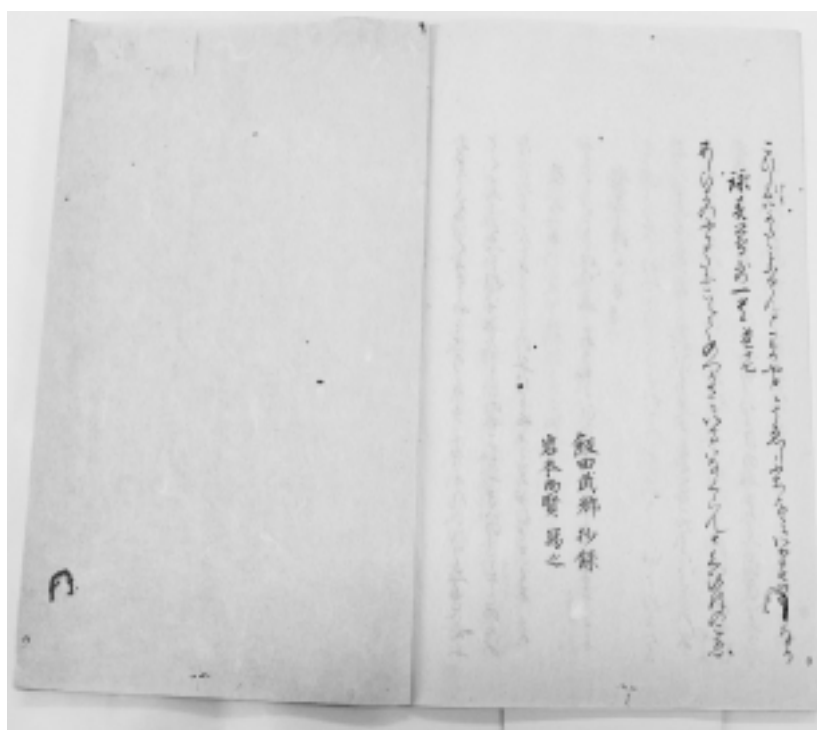
【図版1】表紙と題箋

この度採り上げる河野美術館蔵『柿本朝臣 山部宿禰歌集』も、近世期の『万葉集』研究の中で、従来の『人麿集』や『赤人集』とは違った、より正確な歌集を求めて製作されたものと思われる。まず、書誌について簡潔に記す。外題は、『柿本朝臣／山部宿禰歌集』と表紙左に見え、題箋料紙は金銀箔を散らしている。函架

番号は三四七―八四一。縹色表紙の袋綴じ一冊。表紙の大きさは、縦二四・八センチ、横一五・四センチ、全一九丁である。「當藝廬」の蔵書印（二・三×二・三センチ・朱印）がある。一面一行で、和歌は一行書。書写年時は、おそらく江戸末期、末尾に、「飯



【図版2】山部宿禰赤人 冒頭部分



【図版3】奥書

田武郷 抄録／岩本尚賢 写之」と奥書がある。
内容は、『万葉集』の柿本人麻呂、山部赤人の和歌をそのまま書き抜いたもので、一丁表に「柿本朝臣人麿 七十九首」と、一四丁表には「山部宿禰赤人 四十九首」と、それぞれ端作題が見え、そ

れぞれの万葉歌を書き抜いている。なお、書き入れが多く、またミセケチが墨・朱の二種類でなされている。

二

先に触れたように、本集は、『万葉集』から柿本人麻呂、山部赤人の歌を抄出し、その訓読本文を集めて一書としたものである。本集の末尾には「飯田武郷 抄録」「岩本尚賢 写之」とあるので、歌の抄出と訓読本文の作成は、飯田武郷（一八二七～一九〇〇）の手によるものと考えられる。飯田は本集を編むにあたって、橘千蔭『万葉集略解』の訓をほぼ全面的に利用している。その理由として、『略解』が当時、広く行われていたからというだけではなく、飯田の明確な選択意識が働いていると考えられる。このことは後述する。本集の訓読本文の様態を観察すると、以下の一～四の特徴が認められる。一と二については多数に上る故、数例を選んで挙げ、四については挙例を省略する。挙例には翻刻の通し番号を挙げ、『万葉集』の巻数と『国歌大観』番号を（ ）に示す。

一・当時の通行本（寛永板本またはその後刷本）との異同が三四〇箇所ある。そのうちの誤写と見做される箇所以外は、『略解』の訓と一致している（『略解』の「註」で旧訓を改めている場合も含む）。

人麻呂14

ひむかしのぬにかきろひのたつみえて かへりみすれはつきかたふ
きぬ

（寛）アヅマノ、ケブリノタテルトコロミテ

（巻二・48）

（考）ヒムカシノノニカギロヒノタツミエテ
（略）ひむがしのぬにかきろひのたつみえて

人麻呂46

かもやまのいはねしまけるわれをかも しらすといもかまちつゝあ
らむ

（寛）シラストイモカ

（考）シラズトイモガ

（略）しらずといもが

（巻二・223）

赤人34

あちさはふ いもかめかれて（巻六・942）

（寛）アチサハフ イモカメシハミス

（考）（アチサハ）ブ イモガメミズテ

（略）あちさはふ いもがめしばみずて

〔註〕妹がめしばみずては、しばしば見ずして也。（中略）又宣長は不數見而にて、かれてとよまんといへり。

二・『略解』と異なるところが一八箇所あるがこれらは誤写と認められる。誤写が飯田の抄録と岩本の書写の、いずれの段階で生じたかは不明である（左の他に、人麻呂18・27・59・60、赤人20・23・26・34・37・40・42）。

（本集）

（略解）

人麻呂 16 よろつたひかへりみすれは かへりみすれど

33 かるのいちにわかたちきけ かるのいちにわがたちきけ

（巻二・131）

はたまほこのみちゆくひと
ばたまだすきうねびのやま
も

に なくとりのこえもきこ
えず たまほこのみちゆく
ひと

(巻二・207)

70 よりてをさめんくらなしの

かりてをさめんくらなしの

はま

はま

(巻九・1710)

赤人

1 わたらひのかげもかくろひ

わたるひのかげもかくろひ

(巻三・317)

5 みることねのみしなかゆ

みることにねのみしなかゆ

(巻三・322)

31 おきへなみへなみしつけみ

おきつなみへなみしづけみ

(巻六・939)

33 ちかしかたしほひもみちを

あかしがたしほひのみちを

(巻六・941)

三 一字分の空白が一箇所あり、これは飯田の抄録の当該箇所が判
読不明であったため、書写の時に一字分空白としたものと思われ
る。

人麻呂33

やますゆかは ひとめをおほみ まねくゆかは ひとしりぬ

□み

(巻二・207)

四 書き入れは訂正を記した箇所の他、『万葉集』の原歌に「二云」
などとして見られる異文を書き添えたものが見られる。ただし、
異文の書き入れは全ての歌にわたって漏れなく付されているので

はない。例えば、人麻呂1(巻一・29)の長歌(近江荒都歌)で
は、その異文をすべて書き入れているが、人麻呂27(巻二・
196)198、明日香皇女挽歌)では異文を全く記さないという不統一
がある。このような異文の書入の有無も、飯田の抄録段階でのも
のか、岩本の筆写時のものか、不明である。ただ、岩本は墨筆・
朱筆で二回の本文校閲をしており、書き落としたものがあれば加
筆は可能であったと考えられることも事実である。

三

抄録者、飯田武郷については、専著として坂本辰之助『飯田武郷
翁伝』(昭和19、明文社)があり、その後、山崎節子「飯田武郷」(『學
苑』194号、昭和31・8)が公表されている。坂本の著書は、書名の
角書きに「維新の烈士、国学の泰斗」とあるとおり、尊皇の志士と
しての側面にかなり重点をおいている。続く山崎論文は、飯田に関
する資料を博搜してその業績と人となりを明らかにしており、貴重
である。詳しくは就いてみたい。ここでは、『諏訪市史』(第十
三章「教育と文化」第三節「国学」)の解説を摘記しておく。⁴⁾

・武郷は文政十年(一八二七)江戸に生まれ、六歳で四書の素読
をし神童といわれた。はじめ儒学を学んだが、本居宣長の書を
読んで感激し、松沢義章の感化を受けて平田鉄胤(篤胤の子)
の門に入った。また海野遊翁の門に入って和歌を学んだ。安政
五年(一八五八)「御在所勝手被仰付」で諏訪に帰り片羽に住
んだ。

・岩倉具視は文久二年(一八六二)、公武合休論が不首尾に終わ

ったことから蟄居を命ぜられていたが、ひそかに勤王の志士とつうじていた。武郷もその一人で、具視から密書を受け王政復古の計画に加わった。ときに三十六歳であった。

・慶応元年（一八六五）二月、武郷は家督を長男武夫にゆずり機の至るのにそなえた。同三年秋ついに脱藩して京都に行き岩倉具視のもとで維新の仕事に参与した。武郷は豪毅で潔癖な性格で思うところは、はばかりなく建白した。また、博学であつたから諮問にあたつては適格な答えを出したので側近として信用が厚かつた。

・明治元年（一八六八）十二月京都大学が開設されたとき皇学御用掛を命ぜられ、ついで講師となつた。十代藩主忠礼は、このことを聞いて藩の名誉だとして、先の脱藩の罪を許し禄を増増した。翌二年高島藩でも皇学校をつくることになり、武郷を召しかえして皇学校教授とした。

・武郷は皇学校がなくなつたあと、氣比・貫前・諏訪・浅間神社の宮司をつとめた。明治十年太政官修史局に仕え、十四年東京帝国大学助教授兼修史局編集係となり、後には慶応義塾大学の講師にまねかれた。この間『日本書紀通釈』七〇巻をあらわした。

・明治三十三年、七十四歳で没した。

飯田の業績で特筆すべきは、『日本書紀通釈』七十巻を著したところである。嘉永五年（一八五二）、二六歳から明治三十三年（一九〇〇）に没する前年までの四八年の歳月を費やして完成を見たこの著

は、従来の説を集成し穩健な解釈を施したものである。⁽⁵⁾ 飯田がこの著作を志した基盤に、若年の頃から積み重ねた国学の修養があることはいうまでもない。江戸に生まれた飯田は一六歳の頃に諏訪に帰り元服して高島藩士となる。この頃から国学に興味を持ち本居宣長の著作を読み、平田篤胤の没後門人となつた。⁽⁶⁾ 飯田は賀茂真淵と宣長に私淑し、とくに宣長に深く傾倒していた。飯田の歌文集『蓬室集』（明治三六年、飯田季治）には女婿の大和田建樹による跋文が付されているが、そこに次のような言及が見られる。次のとおりである（新字体に改め句読点を補つた）。

大人は県居翁を尊びて、十月のつごもりには神酒魚など捧げつゝ、御魂祭をし給ひ、鈴屋翁はことに敬ひ慕ひ給ふとて、何にても御霊代にすべき御筆のあとをと、今の本居翁に乞はせ給ひしに、鈴屋翁のみづから書かせ給ひし古事記伝竟宴の折の探題なりとて、忍穂耳尊としるせる紙を得たまひしかば、いたく喜びて御扉の内にこめ、神棚にをさめ給ひしが、今も其家に残りて、又大人の御形見とさへぞなりぬる。

このような飯田の宣長に対する尊崇の念を考えると、飯田が『万葉集』を読むにあつて『万葉集略解』を選んだのは、当然のことであつたといえる。なぜなら、『略解』は、凡例によれば、『万葉考』の所説と「よりよりに翁（筆者注、賀茂真淵のこと）の家につどひてあげつらへりしをもととして」なつた書であり、また、『略解』の作成には宣長の助力が大きく与っているからである。⁽⁷⁾『略解』は、まさに飯田が高い信頼を置くべき性格を備えた注釈書であつた。さ

らに『略解』の訓の利用にあたっても、飯田の見識が働いている。先述のとおり、飯田の『通釈』は、みだりに新見を提出するのではなく、先学の説を丁寧に掲げることが優先している。かような態度を考慮すると、飯田が『略解』の訓をほぼ全面的に採用しているのは、信を置くべき先学の説を尊重する学者としての姿勢が反映したものだといえよう。

明治維新後の活動は、前掲の『諏訪市史』のとおり、教育者、宮司としてのそれである。また、『蓬室集』に収められた作品を見ると、歌風は平安朝の和歌の風を基調としているようである。⁽⁸⁾

岩本尚賢（一八三五―一九〇七）については、『諏訪資料叢書』第一卷（大正一四年、同刊行会）巻頭に略伝が載る。これも摘記すれば、次のとおりである（新字体に改め句読点を補った）。

・故従六位岩本尚賢は諏訪郡上諏訪の人旧高島藩士にして父を信左衛門と称す。天保六年二月十六日出生、通称を順吉郎と云ひ名を尚賢と呼ぶ。

・幼より学を好み資性極めて謹厳にして皇学は本居、平田等の説を師尚し、大義を飯田武郷に質す。

・慶応四年三月甲州路討手官軍嚮導隊半隊司令士として（中略）

甲府城請取の事実あり。彼が手記せる征東日誌はよくその真相を知悉すべく、只此一事のみに依りて見るも彼が如何に恪勤の性格なりしかを思ふを得可きなり。

・明治元年十一月高島藩軍務方勤務となり、後宣教掛を勤仕す。

廃藩後明治五年十月諏訪神社の欄宜職を奉してより、同三十七

年七月一日宮司の職を辞する迄、三十三年間一日の如く神に奉仕せり。而して在職中諏訪神社の廃典を慨し努めて旧記を探り、古式を復古す。諏訪上下両社祭祀の大要及諏訪神社考等の遺稿存す。

・尚賢又歌を能くし詠草少からず。明治四十年十一月廿日病みて歿す。神儀を以て温泉寺瑩城に葬る。享年七十有三才。

岩本はまた、廃藩後、政府が推進した民衆への道德教化を担う教導職として活動したことが明らかにされている。⁽⁹⁾

岩本尚賢の名は、また『蓬室集』に一箇所見えている。次の長歌がそれである（新字体に改め返り点を補った）。

送_下岩本尚賢_中歸_中諏訪_上歌

ひなぐもりうすひの坂は 今の世にせきこそなければ
いまはるみちは さかしかる峰こそなければ 関だにもある世に
しあらば あつらへてとどめもせまし さかしかる峰だにあら
ば 道なしといひもせましを とどむべきせむすべなみに 立
ちて居てわがなく涙 その峰のさざりとなりて ゆくさきにた
なびき渡り わがこふる心のまもり 君にしらせよ

反歌

我がこふるころしそはばうすひ山なげきの霧にきみやあくら
む 関だにもある世にあらば碓氷山あつらへつけてとどめてまし
を

これによって飯田と岩本とが交流を持ったことが証されるが、詞

書にも歌にも両者の間柄を具体的に示す言がなく、また詠作の日付もないため、二人の交流がいつ、どのような形で行われたかは分からない。この点については、今のところ、先に挙げた「略伝」の他、拠るべき資料が見られない。それ故、以下は推測になるが、岩本は、国学を学ぶ過程で、平安朝以降の（おそらくは版本の）『人麻呂集』、『赤人集』に疑念を抱き、それらの正しいありようを飯田に質したのであろう。飯田は、それに対する回答として、自らが『万葉集』から抄録した人麻呂歌、赤人歌を岩本に写させた。それが本集なのではなからうか。

『斯道文庫収蔵マイクロフィルム等目録』（自昭和60年 至昭和61年）によれば、本集は江戸末期の写とされる。これが正しければ、飯田、岩本ともに三〇代の頃までに、『万葉集』からの抄録を行い、それを書写したことになる。なお、蔵書印の『當藝廬屋』は、佐藤有藤の蔵書印と考えられる。佐藤は『宇治拾遺物語集』伝本への書き入れが知られるが、詳細は目下わからず、今後考察してゆきたい。

四

最後に、本集の持つ意義について述べておきたい。繰り返しになるが、平安朝以降に編まれた私家集の『人麻呂集』、『赤人集』は、実は人麻呂、赤人の作歌を集めたものとは言えない。飯田の「抄録」もそれを写した岩本の行為も、そのことに疑問を抱き、正しい『人麻呂集』、『赤人集』のありよう求めた結果であったと考えられる。それは換言すれば、平安朝以来、長きにわたって尊重されてきた『人麻呂集』、『赤人集』という、伝承の中の權威に対して、批判の意識

を向けることであった。そこに、江戸末期に国学を学んで生きた飯田、岩本の新しさがあり、本集の意義は、その新しさの所産であるという点にある。しかしながら、彼らの限界もまた、そこにあった。なぜならば、人麻呂、赤人を選んで対象としたこと自体に、この両者を並び称揚する『古今集』序の根強い影響が認められるからである。江戸後期には、本集と同じく人麻呂と赤人の作歌を万葉集から抄出した歌集がいくつか作られたようである。『万葉集事典』¹⁰（佐佐木信綱）には、『二聖歌集』、『人麿赤人歌集』、『二大人集』など、天明期から安政期に作られた四集と時期不明の二集が紹介されている。具体的なことは、それぞれの集についての調査を経た上で明らかにしなければならないが、それらはいずれも『古今集』序の和歌史観に立ちながら、『古今集』尊重の時代に生みだされた私家集の『人麻呂集』、『赤人集』を批判的に捉えて編まれたものと見てよからう。このような江戸末期の国学の潮流が、やがて開花する近代の万葉研究を導く、ひとつの契機となったのではないかと思われる。

注

- (1) 『新編私家集大成CD-ROM版』解題（平成二十一年一月・エムワイ企画）による。なお、この後に新たな資料、大東急記念文庫蔵『人麿集』が紹介され、さらに新たな本文が加わった。
- (2) 『東京成徳国文』26号（平成一五年三月）
- (3) 『万葉集事典』（昭和三十一年・平凡社）
- (4) 飯田武郷に関する資料として、この他に『諏訪近世史』（昭

和四三年、諏訪教育会、『諏訪人物史』（昭和四〇年、諏訪タ

イムス社）、『長野県歴史人物大事典』（一九八九年、郷土出版社）、『信州人物誌』（昭和四四年、信州人物誌刊行会）などがある。これらについては、諏訪市立信州風樹文庫の示教を得た。

（5）坂本太郎『六国史』（昭和四五年、吉川弘文館）は『日本書紀通釈』について、「よく先学の説の粹をとり、適切な解釈を加えているが、独創的な説は少ない。（中略）通釈も近世諸派の学説の集大成として、先行の二書（筆者注、釈日本紀と日本書紀通証）と並んでその価値を主張することができよう」と述べている。

（6）飯田は十一才から十五才まで、江戸の服部元済（芝山）の芙蕖館に学んだ。元済は服部南郭の曾孫で、芙蕖館は南郭が開いた私塾である。南郭は賀茂真淵と親交があったとされることから、芙蕖館での教育も「古学を基礎」としており、飯田はここで「南郭又は真淵の思想にて培われ鍊成された」（前掲『飯田武郷翁伝』）との見方もある。しかし、日野龍夫『服部南郭伝攷』（一九九九年、ペリカン社）は、「南郭・真淵の交渉を証明する直接の資料はまだ管見に入らない」という。飯田の国学の修養は、宣長の著作を読み、平田の門下に入った頃から本格化したと見るのが穏当であろう。

（7）『校本万葉集 首巻』『萬葉集註釋書の研究』第六章「眞淵門下の註釋書」。

（8）『蓬室集』の跋文で大和田建樹が次のような飯田の言を紹介

している。

長歌よむ事は、県居鈴屋の翁いでおはしてより盛になりたれど、ただ万葉に習ふのみにて、我おもひをのぶる器ならぬを如何にせん。ここに見る処ありてしらべ姿をば万葉に借れども、詞は古今以後のを採りて優によりなしたるは、海野遊翁にこそあれ。今の長歌よまん者は師とすべきに足りなん。

これは長歌の詠作についての発言だが、飯田が平安朝以降の歌の良さを認めていたことが伺われる。

（9）谷川 穰『明治前期の教育・教化・仏教』第三章「筑摩県における『教』の位相」（平成二〇年、思文閣出版）。

（10）注3前掲書。

翻刻

一、訂正・ミセケチ等一覧

翻刻を掲載するにあたり、本来であればミセケチなどもそのまま忠実に翻刻するのであるが、『万葉集』訓読本文を明確にするために、異文表記はそのまま翻刻し、ミセケチ等を別に掲げた。なお、朱筆・墨筆は、朱・墨と略称を用いた。

柿本朝臣人麿 七十九首

1～5番歌 濁点すべて朱。

5番歌 二句目「よしの、かは。」：墨。

6番歌 八句「たかしらまして」：朱。（補入記号、ミセケチナシ）

7 番歌 結句「ふな。せすかも」…補入記号のみ朱、「て」は墨。
 9 番歌 結句「たま。かるらん」…補入記号のみ朱、「も」は墨。
 11 番歌 詞書「安騎。時」…補入記号のみ朱、「野」は墨。
 19 番歌 初句「つむさはふ」…ミセケチ朱・墨、「ぬ」墨。
 21 番歌 二句目「おつるともしは」…ミセケチ朱・墨、「もみち」墨。
 22 番歌 一句「あまてらす」…ミセケチ朱・墨、衍字のミセケチ。
 22 番歌 三八句「わかおほきみの」…ミセケチ朱・墨。
 22 番歌 五〇句「あま。みつ」…補入記号のみ朱、「つ」は墨。
 25 番歌 一句「たゝなはく」…ミセケチ朱・墨、「つ」は墨。
 27 番歌 三八句「いやめつらしく」…ミセケチのみ朱、「み」は墨。
 27 番歌 五〇句「あやにかなしく」…ミセケチのみ朱、「み」は墨。
 27 番歌 六八句「いやとほなかに」…ミセケチのみ朱、「く」は墨。
 30 番歌 二六句「さためたまひと」…ミセケチのみ朱、「ふ」は墨。
 30 番歌 八〇句「ふとしりまして」…ミセケチのみ朱、「き」は墨。
 30 番歌 一二〇句「はふり。まつりて」…補入記号墨。
 補入部分「。いましてあさもよしきのへのみやをとこみや
 とさためまつりて」*補入本文は、頭書。補入部分のミセ
 ケチ朱・墨。
 33 番歌 一〇句「ひとしりぬ み」 一字空白。
 33 番歌 一七句「こもりくのみ」…ミセケチ朱・墨
 40 番歌 二〇句「ことくや。きを」…補入記号のみ朱、「し」は墨。
 43 番歌 詞書「讃岐国」…ミセケチ朱・墨
 43 番歌 二四句「かちひきをりて」…ミセケチ朱（本文の「か」字）

49 番歌 初句「ひさかすの」…ミセケチ墨・朱、「た」は墨。
 59 番歌 二句「ふな。あらならし」…ミセケチ墨・朱、「には」は墨。
 74 番歌 三句「わかことも」…ミセケチのみ朱、「か」は墨。
 76 番歌 三句「おもへとも」…ミセケチ墨・朱、「か」は墨。
 76 番歌 四句「きみかつかひとの」…ミセケチ墨。
 78 番歌 二句「をしかのつ。ぬつか」…補入記号・傍記墨。
 山辺宿祢赤人 四十九首
 1 3 番歌 濁点は朱
 3 番歌 二句「かみのしきます」…ミセケチ墨・朱、「みことの」
 は墨。
 3 番歌 一七句「おみのきみ」…ミセケチ墨・朱、「も」は墨。
 5 番歌 一九句「あきくもに」…ミセケチ墨・朱、「さ」は墨。
 5 番歌 二五句「るにしへおもへは」…ミセケチ墨・朱、「い」は
 墨。
 13 番歌 一三句「かたこひのみに。ひのくるゝ」…補入記号・傍記
 「。ひるはも」朱、「ひのことく」墨。
 13 番歌 一八句「おも。そわかする」…補入記号朱、「ひ」墨。
 17 番歌 一二句「しけりわな。らん」…ミセケチ・補入記号朱、「る」
 墨。
 18 番歌 二句「ひとにもとはん」…ミセケチ墨・朱、「つけ」は墨。
 20 番歌 一〇句「しらなみははき」…ミセケチ朱、「さ」墨。
 24 番歌 四句「こゝたもさはぬ」…ミセケチ朱、「く」墨。

- 30 番歌 六句「おほふみのはらの」…ミセケチ朱、「う」墨。
 30 番歌 一二句「ひとはさはなる」…ミセケチ墨・朱、「そ」は墨。
 37 番歌 初句「ふせふけは」…ミセケチ朱、「か」墨。
 37 番歌 三句「さのらふに」…ミセケチ、「も」ともに朱。
 41 番歌 一三句「このやまた」…ミセケチ墨・朱、「の」は墨。
 42 番歌 三句「ありとよひ」…ミセケチ墨・朱、「か」は墨。

本文編

翻刻は、漢字仮名を現行の文字そのまま移し替え、和歌は上句下句の間を一字空け、長歌は、句ごとに一字を空けて区切った。『万葉集』訓読本文を明確にするために、あえて送り仮名を補うこともしていない。また柿本朝臣、山部宿禰それぞれに冒頭から歌番号を付した。

「柿本朝臣 山部宿禰 歌集 全」

柿本朝臣人麿 七十九首

過近江荒都時作哥 卷一

- 1 たまだすき うねびのやまの かしはらの ひじりのみよゆ
 あれまし、かみのことく つがのきの いやつぎくに あ
 めのした しろしめし、を そらにみつ やまとをおきて あを
 によし ならやまをこえ いかさまに おもほしめせか あまざ
 かる ひなにはあれと いはゞしの あふみのくにの さ、なみ

の おほつのみやに あめのした しろしめしけむ すめろぎの
 かみのみことの おほみやは こゝときけども おほとのはこ
 といへども はるくさの しけくおひたる かすみたつ はる
 ひのきれる も、しきの おほみやどころ みればかなしも

反哥

- 2 さ、なみのしがのからさきさきくあれど おほみやびとのふね
 まちかねつ

- 3 さ、なみのしがのおほわだよどむとも むかしのひとに
 またもあはめやも

幸于吉野宮之時作哥二首并反哥二首

- 4 やすみし、わがおほきみの きこしをす あめのしたにく
 にはしも さはにあれども やまかはの きよきかふちとみ
 こゝろを よしの、くにの はなちらふ あきつの、へに みや
 ばしら ふとしきませば も、しきの おほみやびとは ふねな
 めて あさかはわたり ふなぎほひ ゆふかはわたる このかは
 の たゆることなく このやまの いやたか、らし いはゞしる
 たぎのみやこは みれどあかぬかも

反哥

- 5 みれどあかぬよしの、かはのとこなめの たゆることなくまた
 かへりみむ
 6 やすみし、わかおほきみ かななから かんさひせすとよ
 しのかは たきつかふちに たかとのを たかしりまして のほ
 りたち くにみをすれば た、なはる あをかきやまの やまつ

みの まつるみつと はるへは はなかさしもち あきたては
もみちかざせり はかさし ゆふかはの かみもおほみけに つかへまつる
と かみつせに うかはをたて しもつせに さてさしわたし
やまかはも よりてつかふる かみのみよかも

反哥

7 やまかはもよりてつかふるかなから たきつかふちにふなて
せずかも

幸于伊勢國時留京作歌

8 あこのうらにふなのりすらんをとめらか たまものすそにしほ
みつらんか

9 くしろつくたふしのさきにいまもかも おほみやひとのたまも
かるらん

10 しほさひにいらこのはまへこくふねに いものるらむかあらき
しまわを

輕皇子宿于安騎野時作哥

11 やすみし、わかおほさきみ たかひかる ひのみこ かななか
ら かんさひせすと ふとしかす みやこをおきて こもりくの
はつせのやまは まきたつ あらやまみちを いはかねの しも
とおしなへ さかとのり あさこえまして かきろひの ゆふさ
りくれは みゆきふる あきのおほぬに はたす、きしのをお
しなへ くさまくら たひやとりせず いにしへおもひて

短歌

12 あきのぬにやとるたひ、とうちなひき いもぬらめやもいにし

へおもふに

13 まくさかるあらぬにはあれともみちはの すきにしきみかゝた
みとそこし

14 ひむかしのぬにかきろひのたつみえて かへりみすれはつきか
たふきぬ

15 ひなめしのみこのみことのうまなめて みかりたゝしゝときは
きむかふ

從石見國別妻上來時哥二首并反哥 卷二

16 いはみのみ つぬのうらまを うらなしと ひとこそみらめ
かたなしと いそ ひとこそみらめ よしゑやし うらはなけとも よ
しゑやし いそ かたはなけとも いざなとり うなひをさして にき

たつの ありそのうへに かあをなる たまもおきつも あさは
ふる かせこそよせめ ゆふはふる なみこそきよれ なみのむ
た かよりかくより たまもなす はしきよし よりねしいもを いもにたもとを つゆしもの
おきてしくれは このみちの やそくまことに よろつたひ か
へりみすれは いやとほに さとはさかりぬ ましたかに やま
もこえきぬ なつくさの おもひしなえて しぬふらむ いも
かゝとみん なひけこのやま

反歌

17 いはみのやたかつのやまのこのまより わかふるそてをいもみ
つらんか

18 さゝのほはみやまもさやにさはけとも われはいへおもふわか
れきぬれは

19 つぬさはふ いはみのうみの ことさへく からのさきなる
いへりにそ ふかみるおふる ありそにそ たまはおふる た
まもなす なひきねしこを ふかみるの ふかめてもへと さぬ
るよは いくらもあらず はふつたの わかれしければ きもむ
かふ こゝろをいたみ おもひつゝ かへりみすれと おほふね
の わたりのやまの もみちはの ちりのまかひに いもかそて
さやにもみえす つまこもる やかみのやまの くもまより わ
たらふつきの をしけとも かくろひくれは あまつたふ いり
ひさしぬれ ますらをと おもへるわれも しきたへの ころも
のそては とほりてぬれぬ

反歌二首

20 あをこまのあかきをはやみくもゐにそ いもかあたりを^は
^{かくりきにけるイ}すきてきにける

21 あきやまにおつるもみちはしまらくは ^{ちりなみたれそイ}なちりみたれそいもか
あたりみん

日並皇子尊殯宮之時作歌一首并反哥

22 あめつちの はしめのときし ひさかたの あまのかはらに
やほよろつ ちよろつかみの かんつとひ つとひいまして か
んばかり はかりしときに あまてらす ひるめのみこと あめ
をは しろしめすと あしはらの みつほのくにを あめつちの
よりあひのきはみ しろしめす かみのみこと、 あまくもの
やへかきわきて かんくたり いませまつりし たかひかる ひ
のみこは あすかの きよみのみやに かんながら ふとしきま

して すめろきの しきますくにと あまのはら いはとをひら
き かんあかり あかりいましぬ わかおほきみ みこのみこと
の あめのした しろしめしせは はるはなの たふとからんと
もちつきの たゝはしけむと あめのした よものひとの おほ
ふねの おもひたのみて あまつみつ あふきてまつに いかさ
まに おもほしめせか つれもなき まゆみのおかに みやはし
らふとしきいまし みあらかを たかしりまして あさことに
みこととはさす つきひの まねくなりぬる そこゆゑに みこ
のみやひと ゆくへしらすも

反哥二首

23 ひさかたのあめみることくあふきみし みこのみかとのあれま
くをしも

24 あかねさすひはてらせれとぬはたまの よわたるつきのかくら
くをしも

猷泊瀬部皇子忍坂部皇子歌一首并反哥

25 とふとりの あすかのかはの かみつせに おふるたまは
しもつせに なかれふらはへ たまもなす かよりかくより な
ひかひし つまのみことの たゝなつく やはゝたすらを つる
きたち みにそへねゝは ぬはたまの よとこもあるらむ そこ
ゆゑに なくさめてける しきもあふ やとゝおもひて たまた
れの をちのおほぬの あさつゆに たまものはひつち ゆふきり
に ころもはぬれて くさまくら たひねかもする あはぬきみ
ゆゑ

反哥

26 しきたへのそてかへしきみたまたれの をちのにすきぬまたも
あはめやも

明日香皇女木施^{キク}殯宮之時作歌一首并短哥

27 とふとりの あすかのかはの かみつせに いは、しわたし
しもつせに うちはしわたし いは、しに おひなひける たま
も、そ たゆれはおふる うちはしに おひを、れる かはも、
そ かるれははゆる なにしかも わかおほきみの た、せは
たまものことく ころふせは かはものことく なひかひし よ
ろしき、みか あさみやを わすれたまふや ゆふみやを そむ
きたまふや うつそみと おもひしときに はるへは はなをり
かさし あきたては もみちはかさし しきたへの そてたつさ
はり か、みなす みれともあかす もちつきの いやめつらし
み おもほし、 きみとをりく、 いてまして あそひたまひし
みけむかふ きのへのみやを とこみやと さためたまひて あ
ちさはふ めこともたえぬ しかれとも あやにかなしみ ぬえ
とりの かたこひつま あさとりの かやはすきみか なつくさ
の おもひしなへて ゆふつ、の かゆきかくゆき おほふねの
たゆとふみれは なくさもる こ、ろもあらず そこゆゑに す
へしらましや おとのみも なのみもたえす あめつちの いや
とほなかく しぬひゆかん みなにかゝせる あすか、は よろ
つよまでに はしきやし わかおほきみの かたみかこ、を

短歌二首

28 あすか、はしからみわたしせかませは なる、みつものにとに
かあらまし

29 あすか、はあすたにみんとおもへやも わかおほきみのみなわ
すれせぬ

高市皇子尊城上殯宮之時作歌一首并反歌

30 かけまくも ゆ、しきかも いはまくも あやにかしこき あ
すかの まかみのはらに ひさかたの あまつみかとを かしこ
くも さためたまひて かむさふと いはかくれます やすみ
し、 わかおほきみの きこしめす そとものくにの まきたつ
ふはやまこえて こまつるき わさみかはらの かりみやにあ
もりいまして あめした をさめたまひ をすくにを さためた
まふと とりがなく あつまのくにの みいくさを めしたまひ
て ちはやふる ひとをやはせと まつろはぬ くにををさめと
みこなから まけたまへは おほみ、に たちとりおはし おほ
みてに ゆみとりわたし みいくさを あともひたまひ と、の
ふる つ、みのおとは いかつちの こゑときくまで ふきなせ
る くだのおとも あたみたる とらかほゆると もろひとの
おひゆるまでに さ、けたる はたのなひきは ふゆこもり は
るざりくれば ぬことに つきてあるひの かせのむた なひけ
ることく とりもてる ゆはすのさわき みゆきふる ふゆのは
やしに つむしかも いまきわたると おもふまで き、のかし
こく ひきはなつ やのしけけく おほゆきの みたれてきたれ
まつろはす たちむかひしも つゆしもの けなはけぬへく ゆ

くどりの あらそふはしに わたらひの いつきのみやゆ かん
かせに いふきまとはし あまくもを ひのめもみせず とこや
みに おほひたまひて さためてし みつほのくにを かんなか
ら ふとしきまして やすみし、わかおほきみの あめのした
まをしたまへは よろつよに かしもあらむと ゆふはなの
さかゆるときに わかおほきみ みこのみかとを かんみやに
よそひまつりて つかはし、 みかとのひとも しろたへの あ
さころもきて はにやすの みかとのはらに あかねさす ひの
くるゝ^{ことく}まて しゝしもの いはひふしつ、ぬはたまの ゆふへ
になれは おほとのを ふりさけみつ、うつらなす いはひも
とほり さもらへと さもらへかねて はるとりの さまよひぬ
れは なけきも いまたすきぬに おもひも いまたつきねは
ことさへく くだらのはらゆ かんはふり はふりいまして あ
さもよし きのへのみやを とこみやと さためまつりて かん
ながら しつまりましぬ しかれとも わかおほきみの よろつ
よと おもほしめして つくらし、 かくやまのみや よろつよ
に すきんともへや あめのこと ふりさけみつ、 たまたすき
かけてしぬはん かしこかれとも

反歌二首

- 31 ひさかたのあめしらしぬるきみゆゑに つきひもしらにこひわ
たるかも
32 はにやすのいけのつゝみのこもりぬの ゆくへをしらにとねり
はまとふ

妻死之後泣血哀働作歌二首并反哥

- 33 あまとふや かるのみちは わきもこか さとにしあれば ね
もころに みまくほしけと やますゆかは ひとめをおほま
ねくゆかは ひとしりぬ□み さねかつら のちもあはむと お
ほふねの おもひたのみて かきろひの いはかきふちの こも
りのみ こひつゝあるに わたるひの くれぬるかこと てるつ
きの くもかくること おきつもの なひきしいもは もみちは
の すきていにきと たまつさの つかひのいへは あつさゆみ
おとにきゝて いはんすへ せんすへしらに おとのみを きゝ
てありえねは わかこふる ちへのひとへも なくさもる こゝ
ろもあれやと わきもこか やますいてみし かるのいちに わ
かたちきけは たまほこの みちゆくひとも ひとりたに にて
しゆかねは すへをなみ いもかなよひて そてそふりつる

短哥二首

- 34 あきやまのもみちをしけみまとはせる いもをもとめんやまち
しらすも
35 もみちはのちりぬるなへにたまつさの つかひをみればあへる
ひおもほゆ
36 うつせみと おもひしときに たつさへて わかふたりみし
はしりての つゝみにたてる つきのきの こち／＼のえの は
るのはの しけきかことく おもへりし いもにはあれと たの
めりし こらにはあれと よのなかを そむきしえねは かきろ

ひの もゆるあらぬに しろたへの あまひれかくり とりしも
のあさたちいまして いりひなす かくれにしかは わきもこか
かたみにおける みとりこの こひなくことに とりあたふも
のしなければ とこしもの わきはさみもち わきもこと ふ
たりわかねし まくらつく つまやのうちに ひるはも うらさ
ひくらし よるはも いきつきあかし なけゝとも せむすへし
らに こふれとも あふよしをなみ おほとりの はかひのやま
に わかこふる いもはいますと ひとのいへは いはねさくみ
て なつみこし よけくもそなき うつせみと おもひしいもか
かきろひの ほのかにたにも みえぬおもへは

反哥二首

37 こそみてしあきのつくよはてらせれと あひみしいもはいやと
しさかる

38 ふすまちをひきてのやまにいもをおきて やまちをゆけはいけ
りともなし

或本反歌

39 いへにきてわかやをみれはたまとこの ほかにむきけりいもか
こまくら

吉備津采女死時作歌一首并反哥

40 あきやまの したふるいも なよたけの とをよるこらは い
かさまに おもひをれか たくつぬの なかきいのちを つゆこ
そは あしたにおきて ゆふへには きゆといへ きりこそは
ゆふへにたちて あしたには うすといへ あつさゆみ おとき

くわれも ほのみし ことくやしきを しきたへの たまくらま
きて つるきたち みにそへねけん わかくさの そのつまのこ
は さふしみか おもひてぬらん くやしみか おもひこふらん
ときならず すきにしこらか あさつゆのこと ゆふつゆのこと

短歌二首

41 さゝなみのしかつのこらかまかりちの かはせのみちをみれは
さふしも

42 そらかそふおほつのこかあひしひに おほにみしかはいまそく
やしき

讃岐狭峯嶋視石中死人作歌一首并反哥

43 たまもよし さぬきのくには くにからか みれともあかぬ

かんからか こゝたたふとき あめつち ひつきとともに たり
ゆかん かみのみおもと つきてくる なかのみなとゆ ふねか
けて わかこきくれば ときつかせ くもゐにふくに おきみれ
は しきなみたち へたみれは しらなみさはく いさなとり
うみをかしこみ ゆくふねの かちひきをりて をちこちの し
まはおほけと なくはし さみのしまの ありそわに いほりて
みれは なみのとの しけきはまへを しきたへの まくらにな
して あらとこに ころふすきみか いへしらは ゆきてもつけ
ん つましらは きもとはましを たまほこの みちたにしらす
おほ、しく まちかこふらん はしきつまらは

反哥

44 つまもあらはとりてたけましさみのやま ぬのへのうはきすき

にけらすや

45 おきつなみきよるありそをしきたへの まくらとまきてなせる
きみかも

在石見國臨死時自傷作歌一首

46 かもやまのいはねしまけるわれをかも しらすといもかまち
つゝあらむ

天皇御遊雷岳之時作歌一首 卷三

47 おほきみはかみにしませはあまくもの いかつちのうへに
いほりせるかも

長皇子遊獵之路池之時作歌一首并反哥

48 やすみし、わかおほきみ たかひかる わかひのみこの う
まなめて みかりたゝせる わかこもを かりちのをぬに し、
こそは いはひをろかめ うつらこそ いはひもとほれ し、し
もの いはひをろかみ うつらなす いはひもとほり かしこみ
と つかへまつりて ひさかたの あめみるこゝく まそかゝみ
あふきてみれと はるくさの いやめつらしき わかおほきみか
も

反哥

49 ひさかたのあめゆくつきをつなにしし わかおほきみはきぬか
さにせり

或本反歌一首

50 おほきみはかみにしませはまきのたつ あらやまなかにうみを
なすかも

羈旅歌八首

51 みつのさきなみをかしこみこもりえの ふねこくきみかゆくか
ぬしまに

52 たまもかるみぬめをすきてなつくさの ぬしまかさきに
ふねちかつきぬ

53 あはちのぬしまのさきのはまかせに いもかむすひしひもふき
かへす

54 あらたへのふちえのうらにすゝきつる あまとかみらんたひゆ
くわれを

55 いなひぬもゆきすきかてにおもへれは こゝろこひしきかこの
しまみゆ

56 ともしひのあかしのおとにいらんひや こきわかれないへの
あたりみす

57 あまさかるひなのなちゆこひくれは あかしのとより
やまとしまみゆ

58 けひのうみにはよくあらしかりこもの みたれいつるみゆあ
まのつりふね

59 むこのうみふなにはならしいさりする あまのつりふねなみの
うへみゆ

獻新田部皇子歌一首并反哥

60 やすみし、わかおほきみ たかひかる ひのみこ しきま
す、おほととのへに ひさかたの あまつたひくる ゆきしも
の ゆきつゝませ よろつよまてに

反哥

61 やつりやまこたちもみえすふりみたる ゆきはたらなるあした
たぬしも

従近江國上來時至宇治河邊作歌一首

62 もの、ふのやそうちかはのあしろきに いさよふなみのゆくへ
しらすも

題しらす

63 あふみのみゆふなみちとりなかなかけは こゝろもしぬにいにし
へおもほゆ

下筑紫國時海路作歌二首

64 なくはしきいなみのうみのおきつなみ ちへにかくりぬやまと
しまねは

65 おほきみのとほのみかと、ありかよふ しまとをみれはかみ
よしおもほゆ

見香具山屍悲慟作歌一首

66 くさまくらたひのやとりにたかつまか くにわすれたるいへま
たなくに

土形娘子火葬泊瀬山時作歌一首

67 こもりくのはつせのやまのやまのまに いさよふくもはいもに
かもあらん

溺死出雲娘子火葬吉野時作哥二首

68 やまのまゆいつものこらはさりなれや よしぬのやまのみねに
たなひく

69 やくもさすいつものこらかくろかみは よしぬのかはのおきに
なつさふ

題しらす 卷九

70 わきもこかあかもひつちてうゑしたを よりてをさめんくらな
しのはま

71 も、つたふやそのしましをこきくれと あはのをしまはみれと
あかぬかも

右二首或云柿本朝臣人麻呂作

七夕歌 卷十五

72 おほふねにまかちし、ぬきうなはらを こきて、わたるつきひ
とをとこ

題しらす 卷四

73 みくまの、うらのはまゆふも、へなす こゝろはもへとたゝに
あはぬかも

74 いにしへにありけんひとわかことか いもにこひつゝ、いねか
てにけむ

75 いまのみのわさにはあらしいにしへの ひとそまさりてなきさ
へなきし

76 も、へにもきおよへかもとおもへかも きみかつかひのみれと
あかさらん

77 をとめらかそてふるやまのみつかきの ひさしきときゆおもひ
きわれは

78 なつぬゆくをしかのつぬのつかのまも いもかこゝろをわすれ

てもへや

79 たまきぬのさゝくしつみいへのいもに ものいはすまておも
ひかねつも

山部宿禰赤人 四十九首

望不盡山哥一首并反哥 卷ノ三

1 あめつちの わかれしときゆ かんさびて たかくとふとき
するがなる ふじのたかねを あまのはら ふりさけみれば わ
たらひの かげもかくろひ てるつきの ひかりもみえず しら
くも、 いゆきはゞかり とさしくそ ゆきはふりける かたり
つぎ いひつぎゆかん ふじのたかねは

反哥

2 たこのうらゆうちで、みればましろにぞ ふじのたかねにゆき
はふりける

至伊豫温泉作哥一首并反哥

3 すめろぎの かみのみことの しきまず くのことく
はしも さはにあれども しまやまの よろしきくと こゝし
かも いよのたかねの いさにはの をかにたゝして うたしぬ
び ことしぬびせし みゆのうへの こむらをみれば おみのき
も おひつぎにけり なくとりの こゑもかはらず とほきよに
かみさびゆかん いでましところ

反哥

4 も、しきのおほみやひとのきたつに ふなのりしけむとしの

しらく

登神岳山作哥一首并短哥

5 みもろの かみなひやまに いほえさし しゝにおひたる つ
かのきの いやつきくゝに たまかつら たゆることなく あり
つゝも やますかよはん あすかの ふるきみやこは やまたか
み かはとほしろし はるのひは やましみかほし あきのよは
かはしさやけし あさくもに たつはみたれ ゆふきりに かは
つはさわく みるこゝねのみしなかつ いにしへおもへは

反哥

6 あすか、はかはよとさらすたつきりの おもひすくへきこひに
あらなくに

題しらす

7 なはのうらゆそかひにみゆるおきつしま こきたむふねはつり
せすらしも

8 むこのうらをこきたむをふねあはしまを そかひにみつゝとも
しきをふね

9 あへのしまうのすむいそによるなみの まなくこのころやまと
しおもほゆ

10 しほひなはたまもかりつめいへのいもか はまつとこはゝなに
をしめさん

11 あきかせのさむきあさをさぬのをか こえなんきみにきぬか
さましを

12 みさこゐるいそまにおふるなのりその なはのらしてよおやは

しるとも

登春日野作哥一首并反哥

13 はるひを かすかの山の たかくらの みかさのやまにあ
さゝらず くもゐたなひき かほとりの まなくしはなく くも
ゐなす こゝろいさよひ そのとりの かたこひのみに ひるは
もひのことく ひのくるゝまで よるはも よのあくるきはみ
たちてゐて おもひそわかする あはぬこゆゑに

反哥

14 たかくらのみかさのやまになくとりやめはつかるゝこひも
するかも

詠故太政大臣藤原家之山池哥一首

15 いにしへのふるきつゝみはとしふかみ いけのなきさにみくさ
おひにけり

題しらす一首

16 わかやとにからあゐまきおほしかれぬれと こりすてまたもま
かんとそおもふ

過勝鹿真間娘子墓時作哥一首并反哥

17 いにしへに ありけんひとの しつはたの おひときかへて
ふせやたて つまとひしけん かつしかの まゝのてこなか
お かつきを こゝとはきけと まきのはや しけりわたるらん ま
つかねや とほくひさしき ことのみも なのみもわれは わす
らえなくに

反哥

18 われもみつひとにもつけんかつしかの まゝのてこなかおくつ
きところ

19 かつしかのまゝのいりえにうちなひく たまもかりけんでこな
しおもほゆ

神龜元年十月五日幸于紀伊國時作哥一首并反哥 卷ノ六

20 やすみしゝ わかおほきみの とつみやと つかへまつる さ
ひかぬゆ そかひにみゆる おきつしま きよきなきさに かせ
ふけは しらなみさはき しほひれは たまもかりつゝ かみ
よゝり しかそとふとき たまつしまやま

反哥二首

21 おきつしまありそのたまもしほひみち いかくろひなはおもほ
えんかも

22 わかのうらにしほみちくれはかたをなみ あしへをさしてたつ
なきわたる

同二年五月幸于芳野離宮時作哥二首并反哥

23 やすみしゝ わこおほきみの たかしらす よしぬのみやは
たゝなつく あをかきこもり かはなみの きよきかふちそは
るへは はなさをゝり あきされは きりたちわたり そのや
まの いやますゝに このかはの たゆることなく もゝしき
の おほみやひとは とはにかよはん

反哥二首

24 みよしぬのきさやまのまのこぬれには こゝたまさはくとり
のこゑかも

25 ぬはたまのよの深ゆけはひさきおふる きよきはらにちとり
しはなく

26 やすみし、 わこおほきみは みよしぬの あきつのをぬの
ぬのへには とみすゑおきて みやまには いめたてわたしあ
さかりに し、ふみおこし ゆふかりに とりふみたて、 うま
なめて みかりそた、す はるのしけぬに

反哥一首

27 あしひきのやまにもぬにもみかりひと さつやたはさみみたれ
たる見ゆ

十月幸于難波宮時作哥一首并反哥

28 あめつちの とほきかことく ひつきの なかきかことく お
してる なにはのみやに わこおほきみ くにしらすらし みけ
つくに ひのみつきと あはちの ぬしまのあまの わたのそこ
おきついくりに あはひたま さはにかつきて ふねなめて つ
かへまつるか たふときみれは

反哥

29 あさなきにかちのときこゆみけつくに ぬしまのあまのふねに
しあるらし

同三年九月十五日幸於播磨國印南野時作哥一首并反哥

30 やすみし、 わかおほきみの かなながら たかしらしぬる
いなみぬの おほうみのはらの あらたへの ふちゐのうらに
しひつると あまふねさわき しほやくと ひとそさはなる う
らをよみ うへもつりはす はまをよみ うへもしほやく あり

かよひ みますもしるし きよきしらはま

反哥三首

31 おきへなみへなみしつけみいさりすと ふちえのうらにふねそ
さわけ

32 いなみぬのあさちおしなへさぬるよの けなくしあれはいへ
ししぬはゆ

33 ちかしかなしほひのみちをあすよりは したゑましけんいへち
かつけは

過辛荷嶋時作哥一首并反哥

34 あちさはふ いもかめかれて しきたへの まくらもまかす
かにはまき つくれるふねに まかちぬき わかこきくれは あ
はちの ぬしまもすき いなみつま からにのしまの しまのま
ゆ わきへを見れば あをやまの そこともみえす しらくも、
ちへになりきぬ こきたむる うらのことく ゆきかへる し
まのさきく くまもおかす おもひそわかくる たひのけなか
み

反哥

35 たまもかるからにのしまにあさりする うにしもあれやいへも
はさらん

36 しまくくりわかこきくれはともしかも やまとへのほるまくま
ぬのふね

37 かせふけはなみかた、んとさもらふに つたのほそえにうちか
くれをり

過敏馬浦時作哥一首并反哥

38 みけむかふ あはちのしまに たゝむかふ みぬめのうらの
おきへには ふかみとり うらまには なのりそかる ふかみ
るの みまくほしけと なのりその おのかなをしみ まつかひ
も やらすてわれは いけりともなし

反哥一首

39 すまのあまのしほやき、ぬのなれなはか ひとひもきみをわす
れておもはん

六年春三月幸于難波宮之時哥一首

40 ますらをはみかりにたゝしをとめらは あかもすそひくきよき
はまひを

八年夏六月幸于芳野離宮之時應詔作哥一首并反哥

41 やすみし、 わかおほきみの みしたまふ よしぬのみやは
やまたかみ くもそたなひく かはゝやみ せのとそきよき か
んさひて みれはたふとく よろしなへ みれはさやけし この
やまの つきはのみこそ このかはの たえはのみこそ もゝし
きの おほみやところ やむときもあらめ

反哥一首

42 かみよゝりよしぬのみやにありかよひ たかしらするはやまか
はをよみ

題しらす六首 卷八

43 はるのゝにすみれつみにとこしわれそ のをなつかしみひとよ
ねにける

44 あしひきのやまさくらはなひならへて かくさきたらはいたも
こひめやも

45 わかせこにみせんとおもひしうめのはな それともみえすゆき
のふれゝは

46 あすよりはわかなつまんとしめしぬに きふもけふもゆきは
ふりつゝ

47 くらぬのはきのふるえにはるまつと をりしうくひすなきに
けんかも

48 こひしくは^{クイ}かたみにせんとわかやとに うゑしふちなみいまさ
かりなり

詠春鶯哥一首 卷十七

49 あしひきのやまたにこえてのつかさに いまはなくらんうくひ
すのこゑ

飯田武郷 抄録
岩本尚賢 寫之

附記 この論文は、科学研究費補助金（基盤研究C）「平安期における『万葉集』訓読本文の研究」（課題番号23520259 研究代表者京都光華女子大学人文学部教授朝比奈英夫）の成果の一部である。最後に、資料閲覧及び翻刻掲載を許可して頂いた今治市河野美術館、特に学芸員の羽藤公二氏には懇切に対応して頂いた、ここに御礼を申し上げる。